

2020年度「豊岡市地方創生戦略会議」 会議録（要旨）

- 開催日時 2020年7月22日（水）午後1時30分～午後4時30分
- 開催場所 豊岡市役所 3階 庁議室
- 出席委員 中貝座長、中嶋副座長、嶋委員、平田委員、太田垣委員（代理）、太田委員、佐伯委員、永田委員、西垣委員、宮崎委員、木村委員、森委員
- 欠席委員 岡本委員、朝倉委員、高宮委員、古橋委員、橋本委員
- 傍 聴 19名

1 開会

2 中貝座長（市長）あいさつ

地方創生もいよいよ第2期に入りましたが、いろいろな課題が明らかになってきています。皆様のお知恵もお借りしながら精力的に前に進めていきたいと思っています。

直近の状況の報告です。4月～6月の数字ですが、移住相談の件数が4.1倍に増えています。昨年の同時期は32件だったのですが、今年は131件に増えています。しかも、これから大学を卒業して就職をしようという若い方からも相談があるという状況で、おそらく今のコロナの影響が相当あって、迷っていた方々の背中を押したのではないかと考えています。それから地域おこし協力隊です。今、豊岡ではすでに任期を終えて定住していただいている方、現役で活動していただいている方が合計30人いらっしゃいます。過日新たに17人の募集をいたしましたところ、過去最高の56人の応募がありました。本当に多彩で個性豊かな方々の応募があり、市長としては56人全員を採用したいところですが、受け入れる側のキャパシティもありますので、受け入れの人数を増やすことができないかどうか、受け入れ先の方に検討をしてもらっているところです。その中でできる限り採用していきたいと思っています。これもおそらく先ほどの移住相談の増加と背景は一緒で、ある意味チャンスではないかと思っています。

日本人というのは忘れやすいですから、特効薬ができたりワクチンができたりするとまた元に戻ってしまう可能性は十分にありますので、少し早め早めに対応してこのチャンスを具体的な形にしていきたいと思っています。地域おこし協力隊もさらにいろいろな所に声をかけて手を挙げていただこうと思っています。通常ならこれまで豊岡に来なかった方々が来ている、あるいは来ようとしていますので、まちの多様性はさらに増して、まちがますます面白くなるのではないかと考えています。

演劇祭は、フリンジの方も相当多くの劇団が豊岡に行って演劇をしたいと応募してきています。このコロナの中で、日本中でアーティスト・劇団などが大変な目に遭い、相当罵詈雑言を浴びせられたりして嫌気がさしている中に豊岡が気を吐いて演劇祭

をやり、フリンジという形で機会を提供しますと言ったことが、非常に好感をもって受け止められているのではないかと考えています。さらに先ほどの地域おこし協力隊、移住相談などでも「なぜ豊岡なのですか」と聞いているのですが、大体として豊岡のまちづくりに対する評価が非常に高い、あるいは関心が高いということが窓口の肌感覚としてあります。このあたりを総合しますと、今までやってきたことというのは方向としては大狂いしてないのではないかと思います。ものの見方によってはまさに豊岡にとってはチャンスというものが目の前に来ているのではないかと思いますので、しっかりと形に落とししていきたいと思っていますところです。

3 報告事項

第1期地方創生総合戦略の総括について

座長から、豊岡市の地方創生総合戦略の考え方について資料に基づき説明

政策調整課から資料1、資料2、資料3、資料4に基づき説明

副座長から、人口動態について、当日配付資料4-1に基づき説明

副座長 総括として3点こちらに書いて参りました。まず一つ目ですが、人口統計で確認できる成果は認められないということです。地方創生総合戦略が2015年からスタートで2020年の国勢調査のデータがあればもう少しいろいろなことが詳しく分かるのですが、今年の10月に行われることやコロナの影響で、中長期のトレンドを確認するには難しいかなと思っています。基本的に住民基本台帳のデータで毎年の推移を見ながら確認をしようと試みているのですが、なかなか成果は現れてきていないということです。ものすごく長い期間を経てこの豊岡の人口減少というのは続いてきています。過去100年間一度も人口の増加を経験していない、遡れる限り全ての国勢調査のデータを見ても一度も人口が増加していない町が含まれている市で初めて人口減少を止めてみようかと急にやってもそんなに動かないわけです。資料に書いたようにフルスピードで進んでいる巨大客船の舵を操るようなもので、方向転換や減速にはものすごく長い時間と距離を要する、人口動態というのはそういうものだと思います。5年くらいでそんな簡単にV字回復するようなことであれば、地方創生や人口減少がこんな全国的・長期的な問題になっていないはずですが。第1期ですぐ人口統計で確認できる成果が出ないことは想定・織り込み済みですので安心してください。8万人程度のこの豊岡市のデータというのは偶然性や今回のようなコロナの影響などによってすごく乱高下します。それが豊岡の中で行われた努力の結果なのか外で起こっていることの影響なのかというのが非常に分かりにくい部分があります。だめだと思ったら次の年に突然出生率が上がるなどということもあります。ですので、

それに一喜一憂し過ぎて腰を据えた持続的なまちづくりがぶれる、やめてしまおうと途絶える、諦めてしまうということがないようにということが一つのポイントです。

二つ目ですが、では何もやっていないのかということ、そういうことではなくて、持続的・効果的な創生戦略の基礎を築いたということはきちんと確認して、我々はきちんと評価していいことだと思います。その上に第2期をやっていくということです。基礎というのは、取組みの体制や戦略、そのもとでの魅力あるプロジェクトラインナップ、こういうものがきちんとあってここをしっかりとやるべきだということに、魅力あるプロジェクトや魅力ある柱がきちんと立っているということ。そういうことがこの5年できちんとできてきたということは成果として認めていいと思います。

最後の3点目ですが、今年から始まる第2期をどうしようかということです。一つのポイントは、持続的・効果的施策やプロジェクトを着実に実施していくということです。KPI達成ができているものもあります。なかなかまだ見えてこないものもあります。できているものについてもKPI達成ができていくということで思考を止めないでください。常にその上に戦略目標があってその上に上位目標がある戦略体系図を組んできたと思います。そこへ必ず繰り返し立ち戻って、量的・質的改善の両面から工夫を重ねてください。それが最終的な人口動態の効果につながるということにこだわってください。

量的な改善というのはおそらくこの第2期でキーになってきます。若者の転出超過抑制、先ほど「男性よりも女性が半分しか帰ってきていない」というお話がありましたが、ここが非常に深刻です。結婚しない人が少し増えてきた。また、そのベースとなる結婚するような若い女性たちが激減してしまっているから、子どもを産む女性がそもそもいない。社会減と自然減による人口減少を起こしているという状態に陥っています。この量的緩和をしてやらないと若い女性も増えない、子どもの数も増えないという状態になってしまいます。

質的な改善の部分のところは多様性がキーワードになるかと思います。すでにメインのプロジェクトとしてジェンダーギャップの解消が挙がっています。年齢や性別、国籍などや、外から入ってこられる方と協働・協力していくことなど、ありとあらゆる多様性という話題・見方はあると思います。それらを柔軟に受け入れ、受け入れる力とか許容性のようなものが活力に変わっていき、このまちの魅力に変わっていく。そういう状態を質的に実現していけないといけないのではないかと思います。

人口減少というのは出生数が減る、死亡数が増える、転出する人の数が増える、転入する人の数が減る、この4つの数字が足し合わさって人口減少に

つながっているということです。出生と死亡の差し引きが自然減少・自然増、転入と転出の差し引きが社会減・社会増となります。女性人口、外国人の転入、日本人女性の転出の3つが注視すべきところだと思っています。

5ページのグラフは人口ビジョンにも入っているグラフで、2019年のデータを足しています。グレーのバーが出生数の推移です。1985年には1,166人の子どもが生まれていました。2015年までは国勢調査のデータで5年刻みですが、2015年以降は住民基本台帳のデータで1年刻みです。2015年から2019年が5年間の第1期地方創生期間中です。609人からスタートして100人くらい減ってしまった。5年間で100人も減るのは減り方が異常すぎるということで、その要因を探っているのが3つの折れ線グラフです。一番上の黄色が有配偶出生率で、出生行動と示していますが、豊岡市内で結婚している女性がどれくらい平均的に子どもを産んでいるのかという指数です。1985年を100としてそこからどのように移ってきているのかを示したものです。2019年が90ですので100から比べると10%ほど子どもの数は減ってはいますが、おおむね上がったり下がったりしながらではあるが安定的に推移していると見ていただいて結構かと思います。それから、青色が15歳から49歳女性の有配偶率で、結婚行動と示しています。どれくらいの女性が結婚しているのかという指数です。徐々に下がってきていますので、シングルのままでおられる方がじわじわと増えつつあります。最も影響力を及ぼしているのが、赤色で示した15歳から49歳の女性人口です。激減してしまっています。出生行動は安定していて、結婚行動もじわじわ下がってきていますがそれほど激減もしていない。なのに、出生率と出生数が激減してしまっています。最後の15歳から49歳の女性人口が強く影響を及ぼしているだろうということで、先ほどの社会減のところでも女性がどんどん流出してしまっている状況というのが、出生数のところにも響いてきてしまっているといえます。

4ページのグラフで、ちょっと今までと違った見せ方をします。2005年から2009年、2010年から2014年、2015年から2019年と5年刻みで見ていきます。このグリーンのところ为社会増減の5年間の平均数値です。例えば、2005年から2009年では1年間で社会減によって平均477人減少していた。それに対して自然減が平均258人の減少ですので、かつては豊岡で1年間の人口減少のうち、社会減の方が65%、約2/3を占めている状態でしたが、この5か年が3回続いていく中で割合がひっくり返ってしまっています。社会減が純減に占める割合が65%、46%、40%と推移していますが、この第1期の地方創生期間中は、どうやら自然減のところの影響の方が豊岡市の人口減少に対して強い影響を及ぼしていたということです。ただし、先ほど説明しましたように、黄色い部分の6割の影響を持つ自然減少の理由というのは、子どもの

数が激減してしまっているということ、その子どもの数の減少の後ろには子どもを産む女性たちの人口の激減というものがあるということですので、結局背景にあるのは若い女性たちの流出に歯止めがかかっていないからだとして理解していただいてもいいかと思います。

6 ページのグラフは移動の特徴を少し見ていただこうと思って作ってきたものです。地域的にどこへ転出していつているのか、どこから転入してきているのかということを示しているものです。左側の水色のところが但馬内の他の自治体からやってきている、もしくは他の自治体へ転出しているというものです。顕著なのは、女性は但馬内から豊岡へ移っている人の割合が男性に比べて大きくなっているということです。他の傾向はほとんど一緒です。行動圏内としては兵庫県、京都府、大阪府、この2府1県でほとんど8割がた説明がついてしまっていて、東京に行く人や、この関西の2府1県と東京以外に行ったり来たりする人はほとんどいません。比較的行動圏内の狭い方々が豊岡を行ったり来たりしているということです。ただし、外国人の方が増えています。外国人の方で今定住している方が800人くらい、年間の出入りは400人ずつくらいです。下のグラフはどこから来ているのかを示していますが、国内の他の県・自治体に一度入ってそこから豊岡に移ってきた方が約6割、海外から来ている方が約4割と大体そのような内訳になっています。一番多いのは鳥取から来たという方。そして兵庫県内の他の自治体、広島県、大阪府、三重県から来た方と並んでいます。

最後です。先ほども言いましたが、定住人口で外国人をとらえると800人くらいですので、約8万人の人口の1%くらいということになっています。1%くらいと言ったら少ないような気がしますが、もう少し詳しく見ていきますと、なかなか小さいなどとは言っていただけないということがお分かりいただけると思います。若年の定義をここでは15歳から39歳としていますが、その母数でみると外国人住民が約3%（男性2%、女性4%）を占めています。これでもまだ小さいかなという感じがするかもしれません。そこで、移動人口の中に占める割合で見ると、全転入者の22%が外国人です。豊岡市に入ってくる方の5人に1人が外国人という状況になっています。それをさらに若者、15歳から39歳のところで把握しようとするすると28%まで上がり、内訳は男性が21%、女性が35%ですので、女性で転入者、若年という条件を当てはめると、1/3が外国人だということになっているのです。先ほどのほとんど女性が帰ってきていないという説明で使っていた転入実績には、この3人に1人が外国人だという実態がもうすでに織り込まれています。ということは、日本人で豊岡にゆかりがあるとか周辺自治体から豊岡に帰ってきた方というのは相当少ないということになるわけです。ここがまた回りまわって

最初の出生数の激減のところまで戻ってきまして、結局3人に1人の転入者が外国人女性なのですが、この方々は1年から3年くらいの短期の研修などで豊岡をまた出て行くので、家族形成や出産までいかないまま豊岡を出ていくという方ばかりなのです。つまり、母数としてはなんとなく20代や30代が増えているような気がするのに、出生数はものすごく激減が続く。なぜかというところ日本人で家族形成や出産をしない女性の割合が徐々に増えていって、家族で豊岡に暮らし子育てをする方がどんどん減ってしまっているからということです。最後はさらにこの27%の女性がどういうところからなのかということで、全体の16%が但馬内から、20%が但馬以外の兵庫県内から、それに京都府と大阪府で大体半分くらいになります。それから東京圏から少し、全国の他の都道府県、そして赤っぽい2つは、海外から直接入ってくる外国人と国内経由で入ってくる外国人ということです。

座長 なかなか厳しい現実でしたが、現実から目を背けずに頑張るとするのは基本ですので、事実を事実として受け止めて努力していきたいと思います。

4 議事

第2期地方創生総合戦略の推進について

(1) 新たな視点について

ア 多様性を受け入れるまちづくり

ワークイノベーション推進室から資料5、政策調整課から資料6に基づき説明

イ 深さをもった演劇のまちづくり

ウ 国際観光芸術専門職大学（仮称）との連携

大交流課から資料7に基づき説明

(2) 話題提供

環境経済課から資料8、こども教育課から資料9、ハートリーフ推進室から資料10及び政策調整課から資料11に基づき説明

5 意見交換

座長 ここからはフリートーキングにしたいと思いますので、ご自由にご発言ください。

A委員 私私の私塾は定員が30名から40名なのですが、全国から100名近い応募があり神鍋で合宿を行います。演劇祭ではFRINGE自由参加10の枠に60の劇団の希望があります。10月に演出家コンクールを行うのですが、これは8の枠のところ40の希望があります。非常に高い倍率で、豊岡に注目して

いただいている状況です。

専門職大学についても、順調にいくと20倍から40倍くらいの倍率で初年度から超難関校になるのではないかと思います。全国から学生が集まってくるということです。専門職大学についてはできるだけ高倍率を4年間なり数年間保って、それ以降のこと、定員増に向けて頑張るのか、あるいは例えば日本語学校のようなものを併設していくのか、開設してすぐに市あるいは但馬の3市2町と共同して考えていくところがあるかなと思っています。

それから移住については先ほど8家族12人とご紹介がありましたが、これは劇団員の数で、家族まで入れますと今は27人移住をしてきています。順調に人口増に寄与しているのではないかと考えています。

教育のこともいくつかご紹介いただいたのですが、私は昨日久美浜高校に行ってきました。今夜は新温泉町で教育委員会へ入りますが、やはり非常に豊岡が注目を集めています。久美浜高校は先生方が3年続けて豊岡総合高校の授業を見にいらっしゃって、どうしても久美浜高校でもやりたいと言っておられる。豊岡もそういう傾向があるのですが、幼稚園や保育園からずっと同じ子たちが上がってきますから、意見を言う子、スポーツをやる子みたいにもう全部役割分担が決まってしまうので、久美浜高校の先生方が豊岡総合高校で注目したのはやはりすごく活発に意見を言い合うと。私が受け持っているのは就職組のクラスなのですが、すごく男の子も活発です。さらにこれがコミュニケーション教育を受けてきた子たちが今高校生になりつつありますので、そこがうまく先ほどの結婚のところまで現実に結びつくかどうか分かりませんが、自己肯定感を高めるということは相当数出てきているので、小学校低学年で自己肯定感を高め、どんな子でも自分の意見をきちんと言え、そして一番大事なことは自分の人生を自分で決められるということだと思っています。それができないからなんとなく大都会に吸い寄せられていってしまうのだと思うので、そういう子どもたちを育てる一助として演劇、あるいは芸術教育をお役立ていただければと思います。やはり専門職大学ができることで、これはちょっと表現が厳しくなるかもしれませんが、今までは豊岡に残るということが、少し“負ける”というイメージがあったと思います。そうではなくて、豊岡に残るということが非常に肯定的なイメージが一つできるのではないかと考えています。

もう一つは、これもご報告があったように、おそらく今回の新型コロナウイルスの問題で企業誘致のあり方なども変わってくると思います。これまでどちらかというと製造業を誘致してきたわけですが、リモートワー

クはどちらかというデスクワークの方がしやすくなります。そうすると、今までとは移住や企業誘致のあり方が変わってきます。これもなかなか行政の方は文言にしにくいと思うのですが、要するにホワイトカラーやそのご家族が満足できるような生活・文化的な水準を地方で保障できれば、その方たちは移住してくるのではないかということです。他にも教育や文化の役割は非常に大きくなっていくのではないかと考えています。

副座長

第2期に入っていく中で各分野でのエンジンとなる主要なプロジェクトが定まってきて、これまで以上に盛り上げてやっていこうかというところに差し掛かってきているわけですが、このあたりから私の希望としましてはロールモデルと言いますか、もう少しそれぞれのプロジェクトのもとの“顔”が見えるようにしたいと思います。明らかにあらゆる分野で中貝市長と平田オリザさんのこの顔はもう明確なのですが、このお二人の顔だけなんです。それはたしかに他の自治体レベルでも行政とのお付き合いとか経営者間とか、どちらかというおじさんたちのお付き合い上は非常に効果的だとは思いますが、10代後半とか20代の方々が、語弊があるかもしれませんが中貝市長と平田オリザさんの顔で「おお、豊岡か」ということではなくて、もう少し自分たちに近いような年代でそれぞれの分野で最前線を担っておられて、あの人たちと一緒になんかやってみたいという共感というか距離感というか、そういう部分がもう少し重要な気がします。例えばジェンダーギャップの解消の部分のところでもまさにそういう分野で改善してきたところで、例えば豊岡・城崎の観光で新しい仕事ができてきて、そこで女性がものすごく活躍しているとか、鞆づくりでこんな新しい豊岡鞆のブランドを展開していてそこで新しい女性のデザイナーの方が活躍しているとかです。コウノトリの米作りって大体高齢者がやっていたけど実は若い人も結構最近米を作っていますと。生産者というだけではなくて、こんな加工してこんなところにまで売りに行ってこんなふうの評価されている、その顔に若い女性の顔があるとか、そういった形でロールモデルをきちんと特定して応援してあげて、さらにきちんと売り込むというところをぜひやっていただきたいなと思っています。

それから二つ目は支援事業自体が、起業されたビジネスも含めて持続的であり、この戦略のもとで効果的であるために、例えばですが具体的な成果があった人たち同士での交流がきちんとあるとか、それからそういう方々が先輩になってあとから起業したくて来る方々へのアドバイスがなされる仕組みがある、情報交換ができていたりとか、そういったメンター制度のようなものを丁寧に展開していただきたいなと思っています。時には

そういうことによって違う分野の企業同士で「コラボしようぜ」とか「少し助け合おうぜ」とか、豊岡で起業しようとしたときの共通課題が見えてきてお互い助け合えるとかですね、そういったことが可能になってくるのではなかろうかということで、こういったことをぜひしっかりやっていただきたいと思います。

座長 1点目のご指摘の方は、平田さんの通用範囲が世界ですので引き続きもっともっと出ていただきたいと思いますが、市長の方はおっしゃる通りだと思います。1点目と2点目は大変重要なご指摘を頂いたのですが、担当している事務局の方で何かコメントはありますか。特に2点目の方の起業した方々を有効につなぐとか、そしてその方々を全面に押し出していくというご指摘がありました。

事務局 豊岡に来たら面白い人がいるね、面白い人からつながっていくねというようなところから、来ていただいた方が今度は新しい発信者、市民ライターとして情報発信したりとかそういう会議などを定期的に行ったりしていますが、そういったことを広げていけたらと思っています。

副座長 続けてすみません。越してこられて豊岡で起業された経験から少しお話を聞いてみたいのと、かつてこの何年間かで豊岡に入ってきた方と交流があって、越してこられた方は越してこられた方とはそれなりに付き合いはあるのですが、なかなか地元の人と交わっていないとか根付かないとか、そういった部分を含めて入ってきた、起業された経験の中での印象を少し教えていただけたらと思います。いかがですか。

B委員 こちらに来させていただいたきっかけというのが、地域おこし協力隊で来られた方が、豊岡のことを全く知らなかった私にお話をさせていただいて興味がわいたので遊びに来たら、私の地元とすごく似た感じの雰囲気、ちょうど転職したいなと思っていたタイミングでこのまちに出会ったことでふるさとのような気持ちがわいてやってきたという、本当に単純な理由で来ました。こちらに暮らすようになってから地元の方々とどう交流するかということでのポイントだったのが、いろいろなところに顔を出させてもらって若者同士でしゃべったりとか、そういうところからいろんな人を紹介してもらいました。そうすることで、地域の高齢者の方や働く世代の方々とも出会って、自分はこうしたいという思いを話すことによって共感してもらったりしました。多かったのはやはり「そんなの無理だ」とい

うのが私のゲストハウスに対する印象だったと思いますが、こんなことをしたいといういろんな希望とか、夢という形のことを話していると、だんだんと理解もしていただいて協力者も出てきて、「じゃあやってみたら」と支援をいただいて今の形ができたというのがあります。なので、単純に言うてしまうと人間関係を作ることによって、どんなことでもできるなどというのがあります。

今回「IPPO TOYOOKA」を使わせていただいてたくさんアドバイスをいただきました。そこでほかの起業を考えている方とも出会い、お互い難しい点をクリアしていかないといけないねという仲間意識がわいたので、私たちと同じ世代の起業希望者の方々と連携して一緒になって頑張っていけばどうにかなるのではないかという、本当にシンプルなところを地道にやってきたというのが関心につながったのかなと思っています。あとは地元の方と深く付き合っていくこと。私たちがやっているのは宿というものですが、外から来られる方を受け入れる場所ということで皆さん不安も多かったと思うんです。けれども、そこできちんとした人間関係を作ったこういったことをしたいんだと説明して理解していただく、時間をかけて周りを巻き込んでいったということがよかったのかなと思っています。

座長

今「IPPO TOYOOKA」の話が出たのですが、ここはいろんな起業をする上での相談に乗るところです。先ほど実際そこを利用して起業した4事例が紹介されていましたが、なるほどこんなにたくさんの方がやっているんだということが、次の人たちに勇気を与えることになるので、そこを利用して実際に起業した例をどんどんオープンにするようにしてください。

C委員

私は29歳のときにUターンしてきました。その当時まちづくりといいますが会議に出るとご年配の方が非常に多かった印象があって、今回の参加者を見ても分かるように、劇的に豊岡のまちづくりの話って年齢層とか性別が変わってきているなと思っている一人です。そのUターンの話ですが、今、中2の娘がいますが、あと5年するとたぶん都会に出るだろうということをおもいながら今一緒に生活しています。いろんな方のお話を聞く中で、決め言葉は「好きにしたらいいよ、お前の人生だから」と言ったら、帰ってくる確率が高いと聞いています。それが正解かどうか分かりませんが、親として何ができるのかというところを一生懸命考えながら娘とのコミュニケーションを取っています。たぶん私も5年前なら「出た方がいいよ」と言いつぱなしだったかもしれませんが、演劇の話が出てきたり、ふるさと教育の話が出てきたり、英語教育の話が出てきたり、いろいろな思いが

伝わる教育システムというものができて、「豊岡に残った方がいいんじゃないの?」と言いたくなるような子育てをしている一人です。そんな中で、どうコミュニケーションを取ったらいいのか、そういった事例がもう少し、ポスターはすごく参考になっていますが、ああいったものがもっと出てくれば明確に親の気持ちを伝えられるのではないかと考えています。やはり親というのはすごく子どもの人生設計や進路の決定において大きな役割を占めているのではないかと考えています。

3年ぶりに教育現場に復帰して教鞭を取っているのですが、とにかくなんかほわーんとしている学生が増えてきているなということを実感している中で、元気な大人という話が少し出ていたと思います。最初の10分くらいは何も授業せずに、屋台を街中で引いているお医者さんがいるとか、ねぎマッチョっていう太いねぎを一生懸命作っている若者たちがいるとか、そういう元気な大人がいるまちだよということをどんどん紹介させていただいたりしています。そういったことで上手くコミュニケーションが取れているのかどうか分かりませんが、一つの指標として、テスト前希望者補習をしたのですが、40人中30人参加しました。これには学校の先生方が驚かれて先生まで見に来てしまわれた。コミュニケーションを取っている中でなんか惹きつけられるものがあるのかなと、こういう勝手なことを言う先生もいてもいいのかなと今実際に思っているところです。これも正解かどうか全然分かりませんが、とりあえず続けていこうと。豊岡の魅力もしっかり伝えていってあげないといけないのかなと考えています。あと、教育で私は英語遊びに5年携わらせていただいているのですが、5年経ってこれでいいのかちょっと不安に感じることもありました。2月に東京に行って豊岡でやっているそのままの英語遊びを実際にやってみました。なんと参加者の中にインターナショナルスクールに行っている子どももいて、これは大変だと思ったのですが、そのあたりの方にはちょっと満足度は低かったのですが、アンケートを取ってみますと、こんなことを公立の園でやっている地域があるのかということですがすごく保護者から大反響をいただきました。さあ続けていこうと思ったらコロナで続けていけなくなったのですが、とにかくすごく興味を持っていただいて、「豊岡でやっていることは東京でも通用するんじゃない?」と、なんか東京コンプレックスのようなものを勝手に持っていたのか分かりませんが、なんか通用する自分がいてずっとおりてくるものがあって、このままエネルギーとして今後にかそうと思っています。

最後一つだけ。ひとり親支援ということでいろいろな活動をやらせていただく中、教育支援をしようということで募集してみたのですが、一人し

か来なかったんです。広報の仕方も悪かったのですが、その一人が学習障害を持っている子で、密に弱いということで集団では学習できないと。1対1でかえって良かったのですが、すごく記憶力も反応も良くていろいろな吸収をしてくれるのですが、ひょっとしたらこういった子がたくさんいるのではないかと。本当に見たこともないような単語をどんどん読んでいくんです。習っていないはずの単語も言えて、翻訳家とかなれるのではないかと。そういった子どもがいるということが分かっただけですごく幸せに思っ、て、なんか教育に対しての考え方がすごく変わって、今後もぜひ見させてくださいということで継続することになりました。私の方から一つの事例です。

D委員

いくつかご指摘いただきましたが、教員が自分の言葉で伝えたいことを伝える、自分の言葉でふるさとのことを伝える、このことは基本的に重要なことだと思います。教育が今日の本題の地方創生にどんなコミットができるかということですが、まずは豊岡のことを知ることから始めます。総務省が2018年に行った調査では、大学生に「あなたは将来ふるさに帰りますか」という質問をして、「帰る」「帰りたい」という答えと、小中学校の間にふるさとのことについて学んだ記憶があるということが一致しています。ふるさと教育はどこでもやっていると思いますが、ちゃんと認識ができるようなふるさと教育をやっているかどうかの問題なわけです。ともすれば豊岡にはそばがあってお城があってコウノトリがあってというような、知識だけを習得するような授業をしていたのですが、ここ3年は少しシフトを変えて、知る・話し合う・発信する、このようにしています。なので、知ったことを自分の思考で豊岡の価値としてどのように認めるのか、それを外にどのように発信するのか、これをみんなでやっ、ていこうということになっています。但東中の子は東京に出かけて行って全く知らない人たちに声をかけて、そしてふるさと学習で学習した豊岡の物産を紹介して買ってくださいとやっています。そのときに売るだけではなくて豊岡のことを知っていますか、豊岡のどんなことを知っていますかということ聞いて、自分事として豊岡のことが認知されているかどうか、あるいはあまり知られていないということを認識し、それならば自分は今からその問題を解決するためにどうしたらいいのかという学習に発展していく。このようにしてインプットからアウトプットもしながら進めています。全ての学校ではないですが、このように発信をしながらふるさとの教育を地道に続けていくことが、豊岡に帰ってきなさいと言わなくても帰ってきたいと思える子を作ることにつながるのではないかと、今一生懸命や

っています。

学習支援の問題ですが、学習支援は英語も含めて、理想は豊岡でこんな教育をしているのでここに住みたいという人がたくさん増えると、それが私たちの一番のミッション・目的なのですが、その中に学習支援もあって、今考えているのは、今まではできないことをできるようにさせようと一生懸命力を入れていたんです。でもすごく子どもたちは苦痛であったり、先生もなかなか効果がないなと思ったりしている。そうではなくて、この子はこれができるということを見つつけよう、できることをもっと伸ばしてやって、自己肯定感を持つとできないこともできてくるかもしれないということですね。そういう方向で今学習支援をしています。

最後はやはり非認知能力です。これはもう豊岡の売りにしたいと思っていますので、これから5年間の教育プランのテーマは非認知能力です。コミュニケーション教育は今演劇でやっていますがこれにもつながりますし、きっとこれをやっていくと学習能力ももちろんつくだろうという想定はあるのですが、そうではなくて生きる力がつくんです。これから生きる力をつけてきた子どもたちがやがては豊岡に帰ってくる。私たちが一番期待する教育内容が非認知能力だという話で、まだ始まったばかりですから効果はなかなか出ませんが、これは続けていきたいなと思っています。

座長

少し前に高校生と1時間くらい話をしました。その父親がある委員をしていて、付いて回っているいろいろな話を聞いているうちに、豊岡にはすごい大人たちがいることに気づいて、すっかり豊岡が好きになって、いろいろと聞きたいといって私のもとに来たということでした。ですから、具体的な人の顔が見えるということも妙案でしょうし、実際の子どもたちへの語りかけというのはすごく強いものがあると思います。個別具体の大人たちの顔が見えているということの子どもたちへの影響というのがやっぱりあるのかなという感じがします。

D委員

中学生に最も人気のあるふるさと学習のひとつに夢但馬産業フェアというのがあって、100社の会社・団体が総合体育館に集まってブースを作り、中学生がそこを訪れてどんな仕事ですか、どんな苦勞がありますか、どんな楽しいことがありますかとやりとりをする。ものすごく人気があって全ての中学生が参加している。これも顔も見えるし、企業の様子もわかるし、頑張っている人がいるんだなということが中学生に伝わるいい方法だなと思います。

E 委員 資料1と2を見させていただきましたが、社会増減の転入と出生数と婚姻数が2018年から大きく下がっているのですが、これは何か原因が分かっているのでしょうか。もし原因も分かっているのでしたらその辺も教えていただきたいなと思います。また下がることもあるかもしれませんから、それを阻止するためにも原因があれば教えていただきたいと思います。

事務局 正直に言うと分かりません。ただ、一つ可能性としてありますのは、令和という時代が変わるということがありましたので、令和婚ないしは令和になってから子どもの誕生日を迎えたいということがあったのではないかとこの間も聞いています。5月は1日で20組くらいの成婚の届けがあったと聞いています。ですから、一定数そういった意識の方がいたのだと思います。もう一つは正式な通知ではないのですが、2019年度の成婚数につきましては市民課で受諾した分は321件ありました。ですから、2018年に若干落としているということもありますが、数字としては戻していません。

A 委員 18歳に特化した数字は出していないんですか？転出が極端に増えています。2017年に比べて18年と19年は確実に増えているので、この転出の分が何かということが分かれば分かると思います。転出の一つの可能性は18歳で、おそらく高校生の就職がものすごくよかったという可能性はあると思います。やはり圧倒的に景気がよくなると普段就職できない東京や大阪の大きな企業にも高校生が高卒で入れるということは推測できるのではないかと。

座長 それは数字を確認しておいてください。ただ、企業の人手不足で雇用する意欲が非常に強くて、これまで豊岡までこなかった都市部の企業が相当入ってきたと採用の現場でその話を聞いたことがあります、これも一度数字でおさえてみます。

F 委員 今日はいろんな資料を見せていただいて、こんなにいろいろなことをしていて、一つの途中経過だと思いますが、今実際に進んでいるということも感じました。思い出したのが、何年か前に市長が「豊岡は女性に選ばれていないまちだ」と言われたのが私にとってすごく衝撃的でした。でもその中でいろいろな取組みがあり、その一つに例えばお仕事大相談会というのが2年続けてあって、昨年の大相談会、プチ勤務の紹介ですが、その中で市長が知り合われた新聞記者の方がぜひそれを取材してみたいと東京

から来られて、実際に1年間就職されているお母さんを取り上げてインタビューもされ、記事にされたというのがありました。私たちからしてみたら、ロールモデル、特別なことではなくて子育てをしているお母さんたちがこんな形で仕事をできる、あるいはこういうふうな工夫の中で日常を送っているということをPRするよい機会になったと思います。ただ、それは一般紙ではなくてすぐに出回るものではなかったもので、記事そのものは見えていないのですが、ただ、そういうお母さんたちも一つのロールモデルになりますが、当たり前な生活をしている中でこんなことができるんだということもロールモデルとして、特定の人だけではなくて子育て中のお母さんたちにももっと身近なところで発信ができるようになったらなということ、市長と副座長のお話から感じました。

それから、私も3月から東京や大阪には行っていませんが、この間Zoomで研修を始めたのですが、すごく便利だなと思いました。やり方さえ教えてもらったら初心者の方でもグループで討論もできて本当に便利なものだと思います。一方で、最後に残るのは実際に出会っていないのでその辺の人恋しさというか、これが出会って雰囲気やいろいろ味わえたらもっと違ったものになるだろうなと思いました。その研修中である方がおっしゃっていたのが、東京で自粛が終わってたくさんの人、特に若者が集まることになったいくつかの要因の一つに、都会では日頃人と出会う機会が少なかったところに、さらに自粛で人と出会っていなかったからではないか、それが、自粛が終わった途端に出会えるようになったら、わっと出ていくのもそれだけ人恋しい状況があったからではないか、そのことが、三密が避けられないことの一つになっているのではないだろうかとおっしゃっていました。それはすごく私も共感できて、そういった面では豊岡は日常生活の中でも家族であったり地域の人であったり身近な人といっぱい出会えるし、先ほどのZoomのようなりモト的なものも取り入れて両面的なことができるというのが豊岡の強みにならないだろうか。私ももうちょっとZoomのことを勉強して何ができるかなということを考えるきっかけにしたいなと思ったのですが、豊岡にあるからこそ埋もれていてなかなか発信できていない人とのつながりや深いかわりという良い面をもっと発信すると同時に、そういった便利なものも取り入れながらできたらいいなということをお伺いしました。

事務局

ご紹介がありましたのは、この間共同通信を通じて、保育園で実際プチ勤務という方法で勤めておられる方を取材して全国に発信していただいたということです。これももともとは昨年10月に中貝市長と10名のジャー

ナリスト、完全に男性にとってはアウェイな状況での取材だったのですが、豊岡の取組みを紹介していただいて、そこからいろいろな方に発信していただきました。先週末のYahoo!ニュースで、ジェンダーギャップの取組みを全編・後編に分けて紹介していただきました。平田先生と中貝市長以外のさらなるロールモデルをとりましたが、ロールモデルを上手い具合に活用しながら新たなロールモデルを作っていくという、そういう手法も有効なのかなと思っていて、そういうことに取り組んでいます。それと、市内の事業所で結構ジェンダーギャップの解消の取組みをセンターに置いてやっていただいている企業がありまして、厚生労働省の働き方改革2020というサイトでも豊岡市内の2つの事業所の取組みを紹介していただくということで、今準備をしているところです。いろいろな機会や繋がりを上手に利用してどんどん発信は続けていきたいと思っています。

座長

今日のこの会は何かを決めるという会でもありませんし、新年度に行政がやる施策というのは予算で決まっていますが、むしろこのようにフリートークをしながらそこからいろいろなヒントを得て次へつなげる会にするというのが基本だろうと思いますので、どんなことでもどんだんご発言いただければと思います。

G委員

先ほどのYahoo!の記事というのは私も見させていただいて、すごく反響があり、市がこのジェンダーを柱にすること自体が画期的なことだなということがよく分かりました。ただ、ジェンダーを柱にしていくということを、60代70代80代という高齢の方がどこまで理解されているのかというのは思っていて、結局、女性が働きに出るときの足止めになってしまっている部分があるのではないかと思っています。高齢の方が深い理解を示して徐々に考えを変えていただくということに対して取り組んでいただきたいなと思います。

外国人の共生推進というのもありました。もちろん外国人の方がこれだけ入ってきているんだということに少しびっくりしたところなのですが、この先どんどん外国人の方に頼らないといけない、特に介護の現場ではそういう人手に頼らないといけないという現実がやってくると思うので、それも踏まえて高齢の方にもジェンダーギャップ解消やいろいろな方との価値観の共有というものを訴えていかないと、すぐ近い将来いろいろな摩擦が起こってしまうのではないかとことを思いました。外国人の方には言葉の問題が一番だと思うので、そこを解消するための施策を作っていたらなと思います。

A委員 専門職大学の方ではリモート教育の専門家の教員もいますので、とりあえずそこでは外国人向けの講座だとかを出せればとも思っています。

副座長 専門職大学の話が出たので。先ほど私も初めて知ったのですが、地域連携という意味ではリサーチアンドイノベーションセンター、まだ仮称だそうです。そういったものが中にあるとおっしゃっていたので、どこかのセンターを上手にプラットフォームのような形で育てていただきたいなと思っています。一つはふるさと教育とかも関連しています。中・大連携みたいな話。それから地元のコミュニティとの連携であったり地元のNPOや企業との連携であったり、それからできればそこに外国人もというような、複層にそのセンターを核としたようなプログラムを展開していただければなと期待しています。

座長 城崎温泉などでも旅館やいろいろな分野で人手不足がかなり顕著になってきていまして、すでに外国籍の方々かなり入り込んできています。日本語のところに課題があって、それを、「にほんご豊岡あいうえお」とか国際交流協会の皆さんがフォローしているわけですが、かなり日本語のレベルの高い人たちが入り込んできていますので、安い労働力としてというよりも、まさに地域のコミュニティの一員として外国籍の方が入りつつあるということではないかと思っています。実際にまだこれからですが、調理師の勉強をしに来ている外国籍の方々が例えば城崎温泉の旅館に入っているというような、そんな可能性を探るような取組みもきていますので、繰り返しますがコミュニティの一員として外国人を受け入れていくという、その辺の取組みはしっかりとやっていきたいと思います。専門職大学の側にもそういった専門家の方が来られるということですので、よく連携できればと思っています。60代70代の方々のジェンダーギャップをどうするかということについては、事務局の側で何かありますか？

事務局 年代によって本当に価値観とか全く違ってきています。今年戦略会議を設けてまして委員の皆さんに検討していただくのですが、まずはジェンダーギャップとは何か、あと世代間ギャップとは何か、実際に演劇的手法のようなものを用いたいと思っています。実際に他者を演じ、感じて、そして自分事にしていただく、そういった取組みをしながら戦略を作っていくと思っています。できればその過程で来年度家庭や地域に向けて発信する際に演劇を活用したような形でできればと考えています。

A委員 もうすでに取り入れていらっしゃる部分はあると思うんですが、最大のチャンスはやっぱりおじいちゃんおばあちゃんになる時なので、そんなことでは孫に嫌われますよという方法が望ましいかなと。

座長 ご指摘を頂いたYahoo!ニュースの中で私も説明しているのですが、やはり年配者の価値観はすごく強固なのですが、孫を見るとメロメロに溶けると思いますので、テクニックとしてそういうことはすごく大切ではないかなと思います。上手くやっていきたい、巧みにやっていきたいと思っています。

H委員 全般的に今までやってきたことはすごく順調だと思いますし、全般的に賛成できますが、資料の中で「飛んでるまち」というのは、こんなキャッチフレーズ掲げてほしくないです。まだ「飛んでるローカル」は飛ぶとローカルがね、なんか意味の相反するものだからキャッチとしては面白いのに、「飛んでるまち」はちょっと恥ずかしいなと思います。

 全般的な今までの方向性というのはすごくいいと思うのですが、せっかく私が選ばれているということで、二つほど質問です。私は人間の多様性を保全する活動をしていると思っていますが、その多様性の中に障害者のなものが全くない。それは人口増に関係がないからという認識なんだろうかとか思ったり、ここに関係者もないですよ。地方創生というのが一つの事業になってここまで全市的な取組みをしている中で、全くそういう視点がないというのはどうなのかなと感じました。うちの事業所にもなんでこの人がうちにいるんだろうという人がいるんですね。昔からの障害があるという人もいれば、見つからなかった、やっぱり障害があったんだなという人もいるし、なんにもなさそうだけど途中で倒れちゃったり、本当にいろいろな人がいます。本当だったら結婚もしていそうな年代なんだけど、なかなかこれは難しいよなという男女が結構いて、そういうところをすくい上げるようなものが全くなくて、そういうのはいいのかなとちょっとひがみっぽく思ったりしています。さっき「はーとピー」のところで昔はお見合いがあったからということがあってそうかと納得したのですが、私たちくらいの人は何の取柄もないおじさんやおばさんでも結婚していたし、普通に会社勤めして定年まで勤めあげていたわけじゃないですか。ところが今は何の取柄もない人って全く見向きもされない、なんかそういう雰囲気があふれている中でうちに来ていたりするんですよ。難しいと思いますが、そこを救うべきではないのかなと。教育の方で非認知能力と

というのがそういうことに役立っていくのかなと思いますが、できる人だけを最初から集めて相手にしてということで、全く価値観が多様ではないなというのがすごく気になっています。活躍できない人は眼中にないというのがこの印象なのですが、それは人口増に関係がないからなのかなとも思いますが、でもそういう人たちの価値も認めて一緒にやっていくんだというそういうまちの雰囲気を作らないと暮らしにくいのではないのでしょうか。分断みたいな方向になるのではないかなとちょっと思います。

それと、今コロナで旅館でも人が余っているかと思いますが、福祉業界は高齢化などで本当に福祉人材がいらないんですね。障害者でも福祉の担い手はいるのですが、今外から呼んでこようとなったときにはそういう人材というのはたぶんなくて。なので今都会でしんどい思いをして仕事をしている人が家族で移住してきて、暮らしやすさやいろいろなサポートを得て幸せに社会を担ってくれるという、そういうようなこともあっていいのではないかと思います。人手不足のところに来てもしんどいだけなので、暮らしやすく働きやすいまちということでたくさん来ていただいて、それで全体の負荷を下げてみんなでまちを支えていく、そういう方向はどうなのかなとちょっと思いました。

座長

ご指摘のような障害者の方々の問題を地方創生にどう結び付けるかというのは実は非常に難しいというか、大きな課題なんですね。それは冒頭に説明しましたように、豊岡市の地方創生は若者回復率をどう上げるかというところに戦略の柱を置いているものですから、戦略という考え方はそれを実現するために最も効率的なものを採用して行って、多少役に立つというようなことについては入れないという、何を採用するかだけではなくて何をしないかということをしごく明確にするという思考様式ですので、正直その障害者の問題を地方創生に上手く取り込めていないというのは確かなんですね。ただ、可能性はいくつか見えてきていて、今日紹介のあったスパーク協会などがそうですね。あれは発達障害のある子どもも、例えば1歳6か月くらいでスクリーニングをしてどうもこの子はその辺に問題がありそうだということを早く見つけて早く対応すると、小学校低学年くらいで言語を普通に獲得して変わらなくなってくるのが現実結構見えてきています。その時に子どもをどういうふうに療育するかというやり方の一つが、スパークで運動療育なんですね。体を動かせば脳の機能が発達することが分かっていますが、発達障害のあるような子どもたちは、指導員と一緒に動くことができない。それを乗り越えるために演劇的な手法やダンスのような手法でもって、子どもの関心を引いて一緒に動い

ていく。その中で周りの人と子どもたちの間に言わば窓が開かれて、言葉がだんだん獲得できるようになることが分かってきているわけですね。こういうことが見えてくると、豊岡市は教育でもって地方創生をやろうとしているわけですが、柱の一つとして発達障害児の教育も豊岡ではちゃんとできますということで行くと、今豊岡にいる発達障害児とその家族にとって普通になるだけではなくて、むしろ豊岡に皆さんお越しく下さいというメッセージが出せるのではないかとということです。

それから、先ほどの結婚できるかできないかという話が職員の説明の中にあっただけですが、結局コミュニケーション能力がないとなかなか結婚までいかないとか自分の中に閉じこもってしまうということがあるのですが、そのところを演劇でもってコミュニケーション能力を向上しようということを教育の柱に据えてきたわけですね。結局コミュニケーションとは何なのかというと双方向ですので、自分の意見を述べるだけではだめなんですね。簡潔に述べるだけではだめで、相手の球を受け止めるというそういう姿勢がないとそもそもコミュニケーションとか会話は成り立たないわけですね。相手の球を受け止める能力のことを共感と言います。

“Empathy”ですね。共感というのはイギリスではこう言うそうです。自分で誰かの靴を履いてみることに、目の前にいる人の靴を履いてみたときにその人が世界をどう見ているかということが多少とも理解できる。なるほど私はその人の考え方には賛同できなくても、その人の立場に立った時にこういうこと言っているのかということによって思いをはせることができる。それは共感のベースがあるから対応ができてコミュニケーションができるという考え方なんですね。平田さんがおっしゃったのは将来的にはとにかくちゃんと女性を口説ける男の子を育てようということ、決して冗談ではなくてきちっとした意味があるんですね。地方創生の取組みの中でそういう演劇の力というのが大きな推進力になりつつあって、教育のことやいろいろなものが見えてきた。ですので、そういったベースに立った時に障害者の方々はどう対応するかということが、地方創生の中に入ってくる可能性は見えてきたというのが今の段階ではないかと思えます。今十分でないことは申し上げた通りです。

H委員

ちなみに運動療法の演劇的手法がすごく効くというのは息子で実感しています。昔から豊岡ではそういうことが行われているんですね。演劇的手法も個人的にいろいろやってみて、本当にそれも含めて今のやっていることはいいと思います。ただ、治ります、できるようになります、だけが価値だと、特に親には思わせてほしくないというか。できない場合もある

し、できなくても大丈夫というようなそれが欲しいなど。そういう視点はちょっとこの感じでは持ちえないかなど。どう組み込むかはまた考えていきたいなと思います。

座長 ちなみにスパークは平田さんのところの劇団員が仕事をしておられて、ちょうどいい人材だったと思います。

副座長 この第2期をやっていくにあたって、質的なことのところでもまさに多様性というのはキーワードであるし、それがキモだと書いていましたが、豊岡市としては多様性への取組みをやってなかったと言ったらこれまで携わっていた方に怒られてしまうかもしれませんが、本格的に取り組み始めた入口にしていることだと思います。その入口のものすごく分かりやすい部分のところ、男女の差であったり年齢の差であったり日本人外国人の差であったりという、こういうところにまず脚光が当たっていくことだと思います。ただ、多様性という問題はいろいろ言われますので、おっしゃったような障害がある方の話などももっと出てくると思います。そこの掛け算、複合になったような多様性の問題もたくさん出てきます。例えば、若い世代が働くとか子育てするときに親が認知症でという、そういう家族の子育てや働き方をどういうふうに支援するのかということになってくると、一部そういった障害のようなこととクロスする話が出てくると思います。それから先ほどの結婚支援では、そこがやはり多様性の問題だと思います。携わっていらっしゃる方に対して語弊があるかもしれませんが、拝見している限り、ちょっと正攻法過ぎると言いますか、まず結婚するということが前提にあります。我々も統計から見ていて、結婚していないと子どもを産まないというのがありますが、ヨーロッパであれば、生まれてくる赤ちゃんの50%以上が結婚していないカップルからの子どもです。結婚するとなると二つオプションがあって、紹介されるか恋愛で、今はもう圧倒的に恋愛だから恋愛をしないといけない。恋愛できるというのは、稼いでいるとか仕事もプライベートも充実していないといけなくなってくる。でも、結婚できている方もできていない方もそこには多様性があって、生活が充実しているから結婚している人ばかりではないはず。できちゃった婚もものすごく増えているし、再婚も離婚もものすごく増えているし、そこにはいろいろな出会い方や結婚の形があって、いろいろな成婚の仕方や出産がそこにあるということです。その多様性×多様性×多様性みたいところに支援の多様性や柔軟性をちゃんとプログラム化してあげないと、なんとなく古き良きのところに戻ってこれが結婚で

す、こういうふうには結婚は結び付けていくんですと決めつけすぎるとやっぱり難しいかなと思います。ただ、こういうことを意図的にプログラム化したり、行政が支援して成功させるのはものすごく難しいんです。そこに挑戦していただいているというのは評価しますが、このように結婚は本当に多様なんだということなんです。もしかしたら結婚をしようなんていう“結婚”という言葉さえもう取っ払っちゃっていいのかもしれない。暮らしていく中でのパートナーがいたらいいじゃないかということです。結婚はしたかったらしてくださいと。結婚していない方でも子供はできてもいいですと。豊岡で満足して暮らしていて家族を形成して子どもも持ってくださいたらそれでいいんじゃないですかと。いろいろなイベントもそんなマニアックなイベントあるんですかというところでもいいです。先ほどの青年団の方の田植えしているところになぜか若者がわらわらと寄ってきて楽しんでいる。もしかしたらそこから付き合う方が出てくるかもしれない、そんなのでもいいのではないかと思います。

事務局

本当に多様であるというのは事務局も認識しています。例えば昨日は、療育手帳を持っていらっしゃる方が何とかかならないかということで夜遅くに面談して、なんとか上手くいく方法がないか一緒に考えました。あるいは来週ですが、交通事故で脚が悪くなり、車いすを必要としている方を何とかお見合いまでつなげていけないかというようなことを考えます。いろいろなことはやっていきたいと思います。今行政でやっているのは、結婚したい人が結婚できるように応援するということですが、たしかに副座長がおっしゃるように、ヨーロッパの方では婚外子も大変多いですから、そういったことを応援する可能性もあるかもしれませんが、さて行政が文化を変えていくところまで携われるかとなると、これはまた難しいことですが、一生懸命考えていきたいと思っています。

I 委員

外国人の方が増えているとおっしゃっていましたが、私も第一次産業に関わっていますが、実際に高齢者が農業をされている状況です。そういう場合介護もそうですが、誰かが手伝ってあげないと疲れてしまうという状況でありますので、外国人の方が入ってやるということは、人口も増えるでしょうけど、私たちにとっても重要なことだなと感じています。

それともう一つ、子どもたちの非認知能力向上ということをされていると初めて知りまして、私も面接を結構しますが、通り一遍の答えしか返ってこないような子たちがいます。でもこういうことがずっと続けられるようになって、自分を主張したり個性を出したりするような子が企業に入っ

てくるようになると嬉しいなと思いました。

B委員 これだけいろいろなことを考えてやっていただいているというのはすごくありがたいなと思ったのが率直な感想です。私はこちらに来させてもらって、豊岡と以前住んでいたところとの大きな違いは、小さいところなんだけど、ひとつひとつやっていることというのが都市に負けないような最先端のことを考えていらっしゃる。それは実行できるできないではなくやろうとしているところがすごいなと思っています。その中で一つやってほしいなと思うのが、関空と豊岡をできればつないでほしいと思っています。

座長 関空がいいのか羽田がいいのかいうのはありますが、これはちょっとご紹介ですが、兵庫県が但馬空港の滑走路の延長の検討に入っています。これは航空法の施行規則というものが変わって、安全帯を確保するために2026年度末までに最低あと100メートル延長しなければいけない。それだけで40億円となります。お金がかかるのであればこの際、滑走路をもっと1,800なのか2,000なのか1,700なのか分かりませんが延長すれば、ジェット機の就航が可能になる。羽田なり関空まで飛ぶ便が可能になるということです。今は滑走路が短いので、プロペラ機しか離発着ができないですが、プロペラ機は羽田などにはなかなか入れないんです。というのは、ジェット機が飛んだあとには乱気流が発生するので、プロペラ機が飛ぶまでの時間を取らないといけなくて、過密空港の運用上極めて非効率だということで、今のままでは羽田には入れないんです。関空はちょっと分かりませんが、そういったことがあるので、現在滑走路の延長は本当に効果があるのかどうか、コストも含めてですね、その検討に入っていて、その中で成田がいいのか関空がいいのか羽田がいいのか、その議論が出てくると思います。

J委員 私は竹野で旅館をしています。今コロナですごい人材確保のチャンスがやってきています。体感としては4年前くらいの応募数を今年はいただいていて、毎年夏15名くらい採用するのですが、今年は20名近く採用しています。この4年できなかったことが一気にできるかなという希望を持っています。それを踏まえて困ったのが、スタッフが住むところがなかなか確保できなくて採用に至らなかったことがありました。まちの企業同士で寮を共有できるような仕組があればありがたいなと思いました。お試し住宅は戸数が少なすぎるのと、やはり提出する書類などを見ても少しハード

ルが高いですね。城崎では、寮を共有したり個人同士で貸したりというシステムがあるので割と上手くされていますが、市が関与して住めるスペースを確保してほしいなと思いました。城崎の夜の居酒屋さんというのは、派遣スタッフがたくさん集っていて、隣同士の旅館でもスタッフ同士が仲良くなることで、つらい仕事からも逃げずに済むようになっているいい空気ができていますので、そういう場を作りたいなと思いました。私は宿を立ち上げて5年目になるのですが、立ち上げたときのコンセプトに、泊まりに来た方に豊岡市のいいところを知っていただいて、いずれ移住を決断したときに候補としてあがったらいいなというのがあります。その移住希望者の第1号がやっと出まして、このコロナが後押しになったのですが、42歳の横浜在住の方が市の方と連携を取って、協力隊として入るか豊岡市の企業に働きに行くかで年内には移住してくださるといような運びになっています。移住の話でいくと、今、竹野が小学校統合のことや新校舎設立でいろいろ難しく進んでいる状況なのですが、ここで、小中一貫の素晴らしい教育システムを平田さんにも入っていただいて、豊かな自然の中でここの教育システムはめっちゃイケてますよというのをアピールできれば移住の方にもつながってくると思いますし、いい感じに全部を巻き込んでいけるのではないかと思います。

外国人の移住者の件が出ていましたが、城崎の旅館に入り込んでおられる外国人がたくさんいてうちでも採用しているのですが、豊岡の「あいうえお」までわざわざ日本語を学びに通っておられます。それもごく一部で、学べていない外国人の方がすごく多くて、この間城崎の旅館組合の方とも話したのですが、城崎にまず日本語学校を作してほしい。その費用を個人で持つのではなくて、旅館組合の予算から割くのか市の予算を割いていただくのか、そういう仕組みができればもっと城崎に働きに来たい外国人も増えるだろうなという話で終わっていますので、またよろしく願います。

座長

日本語学校のことについては、今年度外国人との共生戦略を作ることになっています。どうなるかは分かりませんが、そこは検討課題としています。それから寮の話ですが、例えば、トヨオカカバンアルチザンスクールというのがありますが、ここは1年間学びに来るわけです。その間の宿泊施設がないということで靴工業組合の側で建物を改修してシェアハウスにしているのですが、その改修費用を市が支援するというので実際にやっています。城崎では、一度話が来て結局だめだったのですが、大火があったときにたくさん焼けてしまったものですから、大きな広場があって、

道に面した方はそれぞれのお店を作ればいいので、使い勝手の悪い奥側に旅館組合で共同の寮なりを建ててはどうかという構想があって、市としてはそれが動くのであればそれに対する支援をするつもりでいました。地権者との関係で一部難しいことがあって、実現しないままになっています。もし建物を皆さんで共同してやろうというようなことが本当に具体化するのであれば、そこに対して市が支援をさせていただくということは不可能ではないと。むしろ、これを市の方で作ってくださいという方がなかなか困りますので、計画の側でそこまでしっかりしたものができるかどうかということだと思います。他方で、平田さんの劇団員の方々も当初の見込みより相当多く豊岡に移り住みたいという話があったり、それから先ほどあったように移住相談の件数の激増もあって、現在担当部署の方で移住促進の施策体系の見直し作業に入っていますので、その中でそういったことも論点としては検討させていただきたいと思います。

A委員

今までの移住促進は家族でというのが中心だったと思いますが、今回のことでフリーランスが話題となっています。フリーランスというのは別にフリーターではなくてきちんと仕事はしているのですが、特に演劇人なんかは、介護とかのアルバイトをしながら演劇を続けている人間が多くて、実際にうちの劇団にも一人そういうのがいたのですが、東京に比べるとちょっと時給が安いんですね。その割に家賃は高い。豊岡のアパートはみんな一人暮らしには広すぎるんですよ。それとお試し住宅はクーラーが入ってなくてちょっと無理みたいなどころがあるので、そのフリーランスの方たちが気軽に入れるような、アパートなのか寮なのかそういったものを今後は考えていただけるといいかな。あるいは、いわゆるエッセンシャルワーカーの方たちがもし来てくれるのであれば、そこには家賃補助や積極的な支援をしますよというのも一つありかなと思います。それから専門職大学ができますと専門の教員がいますし小さい大学とはいえ相当英語ができる学生も一定数来ますので、多少訓練をすれば日本語教育にも充てられるかと思います。それから日本語学校というのはすごく難しく、どのランクを狙うかによって全然違って来るんですね。出てすぐ就職なのか、大学に行くことを前提とするのか、初期投資のいるものですからそのあたりはやはり専門職大学との関係も含めてきちんと検討をしていただく方がいいかなと思っています。すぐできるものと分けた方がいい。

ちなみにですね、うちの劇団員が移住してきましたが、男性の理由で移住してきた家族はありません。カップルで両方が劇団員というのはありますが、あとは奥さんが女優で旦那さんは関係ない仕事をしていて、奥さん

がどうしてもうちの劇団が豊岡に移転するからということで、男が必死になってこちらで仕事を探すという。完全にそういう時代なんだと思うんです。要するに、企業誘致してそこに男性が就職先を見つければ奥さんは黙ってついてくるという、昭和の時代の企業誘致・Uターン戦略ではもうだめで、まさに女性に引っ張ってきてもらうような形に戦略を変えていくことが必要かなと思います。

座長

どうもありがとうございました。最後に一つだけ発達障害児のことについて少しご紹介したいのですが、できるだけ早く見つけて療育に入るのがいいと言われていますが、なかなかそこが見つけられにくいのと、それから保護者の側にもひょっとしたら来年は普通になるのではないかという思いがあって、いよいよ学校に入る直前になって初めて分かるということが多くあります。1歳6か月くらいまでにそれが分かって、早く療育に入るといい結果が出ることも分かっているのですが、それを見つけるために膨大な量の質問項目があります。今まではそれを全部手書きでやっていたのですが、豊岡市は日本で初めてこれを研究機関と組んでアプリ化をしました。そうすることで保健師などは面談する前にその情報が分かりますから、会ったときにいきなり相談の中身に入れる。今まではまだ書けていないところを面談中に書いたりしていてかなり効率が悪かった。そこに効率がいいような仕組みができましたので、今度はそこで保護者の方々の背中を押して、そして一步を踏み出してもらおう。そのことによって早く療育がスタートすることが可能になりました。これはこれで費用がいるものですから、クラウドファンディングをやろうかと思っています。それはお金を集めるという意味だけではなく、クラウドファンディングを通じてこんなことをやっているということを全国の人々に知ってもらいたいと思っています。これが上手くいったら日本中が同じことをやればいいということにもなりますし、なんなら一日の長がある豊岡に移ってきたらいいよということにつながれたらいいと。そんなことを今スタートしているところです。

副座長の最初のコメントにありましたように、100年間ずっと人口減少を続けるという、いわば巨大な船の方向を変えるというのはちょっとやそっとで結果が出てくるものではないと。人口減はむしろ加速しているような状況にありますが、この5年間で確実にエンジンを作り上げてきた、それは間違いないのだろーと思います。そのエンジンに基づいて様々な施策を展開もしてきました。このことは豊岡市が成し遂げてきた大きな成果だということをまず理解した上で、くじけることなく地道に続けていきたい

と思っています。